

一般選抜 前期 国 語 (二日目)

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

類人猿の子ども特有の遊びに、ピルエットと呼ばれるものがある。

ピルエットとはぐるぐると回転することだ。この遊びはサルには見られず、類人猿にしか見られない。フランスの社会学者ロジェ・カイヨワが分類した四つの遊びの中で最も自由な、フユウ感に満たされ冒険的な緊張感に包まれる遊びで、類人猿が人間に進化するにつれてこの遊びは拡大し、ダンスという音楽的な才能と結びついていった。

私は人類が直立二足歩行を始めた理由の一つに、この「踊る身体」の獲得があったと考えている。

かつて人類はジャングルを四足で歩行していたが、やがて二足歩行へと変化する。歩行様式⁽¹⁾が変わった理由として、二足のほうがエネルギー効率も良く、遠くまで食物を集めに行けたからという説と、安全な場所で待つ仲間の元へ栄養価の高い食物を運びやすかったからという、二つの説がこれまで有力だった。

しかし、私は別の考えを持っている。

四足で歩行すると手に力がかかり、胸にも圧力がかかって自由な発声ができない。しかし二足で立てば支点が上がり、上半身と下半身が別々に動くので、ぐるぐる回ってダンスを踊れるようになる。

また二足で立つと胸が圧力から解放されて、喉頭が下がり様々な声を出せるようになる。言葉を獲得する以前の、意味を持たない音楽的な声と、音楽的な踊れる身体への変化によって、共鳴する身体ができる。この身体の共鳴こそが人間の共感

力の始まりで、そこから音楽的な声は子守歌となり、やがて言葉へと変化する。人間はそうやって共感力を高めながら、社会の規模を拡大していったのではないか。

『サピエンス全史』で知られる歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、ホモ・サピエンスが言葉を獲得し、意思伝達能力が向上したことを「認知革命」⁽²⁾と呼び、種の飛躍的拡大の最初の一步と考えた。しかし私は「認知革命」の前に「共感革命」があったという仮説を持っている。

もし七万年前に言葉が登場したという説が正しければ、人類はチンパンジーとの共通祖先から分かれた七〇〇万年の中でわずかにパーセントの期間しか言葉を喋^{しゃべ}っていないことになる。その点を踏まえれば、まず身体があり、次に共感という土台があった上で言葉が登場した

A。

イギリスの霊長類学者ロビン・ダンバーは「社会脳仮説」⁽³⁾を唱え、言葉は脳を大きくすることに役立っていないと指摘している。人類の脳は二〇〇万年前に大きくなり始め、ホモ・サピエンスが登場する前に、すでに現在の大きさになっていた。つまり言葉が脳を大きくしたわけではなく、むしろ先に脳が大きくなり、その結果として、言葉が出てきたと考えられるのだ。

（ア）なぜ脳は大きくなったのだろうか。

ダンバーは人間の脳と、サルや類人猿の脳の大きさの違いについて、様々なパラメータ[※]を比較して検討した。その結果、大きな集団で暮らしている種ほど脳が大きいという事実を発見した。大きな集団で暮らせば、付き合う仲間の数が増える。自分と仲間、あるいは仲間同士の社会的な関係をしつかり覚えていいるほうが、様々な場面で適切に行動できる。つまり社会の中で他者と交わるために、脳を大きくする必要があったと考えられるのだ。

ただし、脳が適応できる集団の人数にも限界はある。

時代によって脳⁽⁴⁾のサイズは変化しているが、それぞれの時代の大きさから推定して、人類の平均的な集団人数を割り出すことができる。七〇〇万年前から五〇〇万年間は、現在のゴリラやチンパンジーと同じくらいの脳の大きさで、集団サイズ

は一〇〇二〇人程度だった。その後、脳が大きくなるにつれて適正な集団サイズは大きくなり、現代人の脳の大きさ（約一五〇〇cc）だと、一五〇人程度とされている。

人類が言葉の獲得に至った理由の一つは、脳の中の記憶を外に出すためだったのではないかと私は考えている。

人類が言葉を獲得する以前は、個人的な体験を仲間に伝えられなかった。しかし言葉という音声記号によってはじめて伝えられるようになっていった。⁽⁵⁾

今、私たちは文字を紙に書いたり、メールやSNSなどの伝達手段の発達により、個人の記憶を外部のデータベースへ移しやすくなった。アウトプットの手段が増えれば、いずれ会話は必要なくなるかもしれない。会話をしなくても記憶を自在に取り出せるようになり、記憶のすべてが脳の外にある状況が訪れる可能性すらありえる。農耕牧畜が始まった一万二〇〇〇年ぐらい前と比べると、現代人の脳は一〇〇三〇パーセント縮んでいるという説もあり、（イ）今後、脳が不要となる時代が来るかもしれない。

さらに私たちは、考える力や判断力までAIに委ね始めている。人間は徐々に B₁ な存在から B₂ な存在になっている。 B₃ になれば、あらかじめ立てられたスケジュールに従って動くようになり、あらかじめ集め

られた情報に従って判断を下すのは当然だ、と考えるようになる。こうなれば、もう機械と同じである。

もっと大変なのは、未来が過去に奪われ始めていることだ。⁽⁶⁾ AIは情報がなければ動けない。答えを出すときには、必ず過去の情報を分析して未来を予想する。それはつまり過去に縛られているということだ。AIはゼロから一を生み出せないから、過去の出来事が未来をつくることになる。その未来のスケジュールに従って人間が動くのであれば、私たちはもう B₄ に未来を描けなくなるだろう。

だからこそ、AIの裏を^bかいて、過去を捉えなおす必要がある。過去を振り返り、かつての誤ったポイントで別の判断をしていたらどんな現在が見えるのか、そしてその現在の^{かなた}彼方にある、まだ起こっていない未来を新たに創造していく必要がある。

言葉には重さがないし、どこへでも持ち歩きができる。だから遠くにあって自分には体験できないこと、あるいは過去に起こってしまった体験のしようがない出来事を言葉によって自分のものにできる。現実にはないものも言葉によってつくり出せる。まさに虚構^cだが、その虚構を信じることで、物語を共有できるようになり、一気に世界は広がった。

そもそも言葉は七万年前に突然出てきたものではないだろう。恐らく最初に生まれたコミュニケーションは、音楽的なものだったはずだ。音楽的なコミュニケーションとは歌を C。身体でリズムをとり一緒に踊る行為も含まれる。私たちは会話をしているとき、身体を使って相手に同調している。相手の言っていることに頷^{うづ}き、顔や手などを動かしながらリアクションしている。言葉が当たり前になった今でも、私たちは身体を使ってコミュニケーションしているのだ。恐らく最初の頃の言葉は、意味を伝え合うものではなかっただろう。

(ウ) 言葉は意味を伝えることが重要な働きである。けれど同じ言葉でも、相手と自分の関係や、ちょっとした言い回しで意味は変わってしまう。些細^{ささい}な会話や何気ないメールのひと言で、相手に誤解されてしまった経験は誰にでもあるだろう。本来の言葉は、やはり肉声を伴って対面で行われていたはずで、言葉にできない要素こそが、とても重要な役割を果たしていたのだ。

音楽を拡張すれば、身振り手振りになり、マナーの問題にも通じてくる。相手を上目遣いで見るのか、見下ろすのか、それは言葉にも表れるし、関係によって態度も変わる。そうやって対面でのコミュニケーションは一つのリズムをつくる。食事⁽⁷⁾も、こういう順番で、どのぐらいの時間をかけて相手と合わせながら食べるのか。これも一つの音楽的なリズムをつくっている例 D。

人間が仲間と付き合うために持っているリズム感は文化とも言えるだろう。その文化は言葉が登場する前につくられ、一五〇人以下の小規模な集団内で通用するリズムとして共有された。そこに言葉は必要とされない。事実、ゴリラは言葉を喋れないが、群れとして一つの生き物のように動くことができるし、その能力は現代人も持ち合わせている。私たちの日々の出会いや社交も、そういう身体⁽⁷⁾の共鳴によってつくられているのだ。

『社交する人間 ホモ・ソシアビリス』という著作もある劇作家の山崎正和さんは「社交とはリズムである」と言っていた。そして「社交とは文化である」と考えていた。社交は言葉ではなく、身体の共鳴なのだ。

ホストが物語を紡ぎ、今日はこういう社交をしましょうとみんなに呼びかけて、人々が集まってくる。だけど参加する人たちは、物がもらえるから集まるわけではない。ホストの物語やリズムを共有するために集まるのだ。

例えば文化やリズムは、茶道の中にもある。お茶の席で使う帛紗^{ふくさ}には、帛紗さばきと呼ばれる作法があるし、茶器をどのように扱うかという、身体⁽⁸⁾の作法がある。その作法を演じる中で、ホストが考える身体の流れ、人々の付き合いが演出されて共有され、同じゴールに向かう人々の心を一つにする。完成された社交は、言葉だけではできておらず、ホストの考える物語を身体で共有するところまで含まれるのだ。これは一種の音楽ともいえるもので、言葉を獲得する以前の人間の社交とは何かがよくわかる事例だろう。音楽的なリズムの共有によって、仲間意識が生まれるのだ。

本来その仲間は現代のような人口密度の高い一〇〇〇人、二〇〇〇人という数では成立しない。せいぜい一五〇人程度の顔見知りの間柄であることが不可欠だ。ただ人間は、都市を発展させ、一生懸命にこの関係性を拡大しようとした。スポーツやコンサートに集まる何千、何万人が、その試合に、あるいはコンサートに熱狂し、ときには会場でウェーブをつくったり、手を振ったりして身体をキョウシン⁽⁹⁾させようとする。その基礎となるのが、まさに身体を共鳴させる音楽的なコミュニケーションなのだ。

(山極壽一『共感革命——社交する人類の進化と未来』河出書房新社より。文中省略あり。)

※注 パラメータ：評価する際の指標

〔問二〕 太線——部(一)・(二)の漢字を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | |
|-----|-------|---|---|---|---|--|
| (一) | フエウ | ① | 浮 | | | |
| (二) | キョウシン | ① | 信 | | | |
| | | ② | 振 | | | |
| | | ③ | 震 | | | |
| | | ④ | 進 | | | |
| | | ⑤ | 申 | | | |
| | | | | ③ | 不 | |
| | | | | ④ | 負 | |
| | | | | ⑤ | 歩 | |

〔問二〕 傍線——部(1)「歩行様式が変わった理由」の筆者の考えとして、もっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① エネルギー効率が良く、遠くまで食物を集めに行くためである。
- ② 安全な場所で待つ仲間の元へ栄養価の高い食物を運びやすいためである。
- ③ 従来の二つの説は、どちらも生きるために必要な食物の獲得に関連しており、非常に説得力がある。
- ④ 上半身と下半身を別々に動かして踊れるようになることが、理由の一つである。
- ⑤ サルと同様にピルエットのような自由な遊びを楽しむことが、理由である。

〔問三〕 傍線——部(2)「認知革命」の説明としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① ユヴァル・ノア・ハラリは文化史における認識論の飛躍的發展を「認知革命」と呼んだ。
- ② 筆者は「認知革命」の土台として「共感革命」があったはずだと考えている。
- ③ 一般的な仮説では、「認知革命」を土台にして「共感革命」が起きたとされている。
- ④ 人類がチンパンジーとの共通祖先から分かれて言葉を獲得した七〇〇万年前に起きた。
- ⑤ ホモ・サピエンスは勢力を拡大し続けてきたが、その終局を告げるのが認知革命である。

〔問四〕

空欄

A

に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① というハラリの説には納得できない
- ② はずがないと言える
- ③ と考えるほうが自然だろう
- ④ と解するのは荒唐無稽である
- ⑤ と主張する証拠は薄弱である

〔問五〕 傍線——部(3)「社会脳仮説」の説明としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 人類の脳は二〇〇万年前に、すでに現在の大きさになっていたという説。
- ② 言葉を話せるようになったために社会性が広がり、その結果、脳が大きくなったという説。
- ③ 集団の中で仲間と適切な行動を取る必要があったために、脳が大きくなったとする説。
- ④ 言葉は話せずとも二足歩行ができれば脳は大きくなるという説。
- ⑤ 人間だけでなくサルや類人猿も社会的な知性を持っているとする説。

〔問六〕 空欄（ア）～（ウ）に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑩の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|----------|-------|-------|--------|-------|
| ① もし | ② まるで | ③ そして | ④ しかし | ⑤ いわば |
| ⑥ もしかすると | ⑦ まず | ⑧ むしろ | ⑨ もちろん | ⑩ では |

〔問七〕 傍線——部(4)「脳のサイズ」の説明として、正しいものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① サルや類人猿では、大きな集団で暮らしている種ほど脳が大きい。
- ② 二〇〇万年前より以前は、人類の脳の大きさはゴリラやチンパンジーと変わらなかった。
- ③ 脳のサイズから、人類の平均的な集団サイズも推測することができる。
- ④ 人間の脳のサイズは七〇〇万前から五〇〇万年の間、ほとんど変化しなかった。
- ⑤ 脳が十分大きくなりさえすれば、どのような数の集団にも適応できる。

〔問八〕 傍線——部(5)「られる」と同じ用法の「られる」を使った文を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 旬の野菜を食べられるので、自家菜園を始めた。
- ② 先生が来られるので、失礼がないようにして下さい。
- ③ 寂しげな生徒のことが案じられる。
- ④ 身が切られるような思いで、彼を見送った。
- ⑤ 日記を見られるのは絶対に嫌だ。

〔問九〕 波線~~~~部 a、d の言い換えとしてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びな

さい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|--------|---|--------|---|---------|---|----------|---|--------|---|-------|
| a | アウトプット | ① | 発信 | ② | 外注 | ③ | 排出 | ④ | 記述 | ⑤ | 会話 |
| b | 裏をかいて | ① | 虚をついて | ② | 横車を押して | ③ | 反対のことをして | | | | |
| c | 虚構 | ① | 示唆を受けて | ⑤ | 真偽を確認して | | | | | | |
| d | せいぜい | ① | パラドックス | ② | コンセプト | ③ | デメリット | ④ | フィクション | ⑤ | アイロニー |
| | | ② | 少なくとも | ③ | およそ | ④ | のべ | ⑤ | あたかも | | たかだか |

〔問十〕 空欄 B₁ B₄ には、「自律的」「他律的」のどちらかの語が入ります。二つの語の組み合わせ

としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| ① | B ₁ 他律的 | B ₂ 自律的 | B ₃ 他律的 | B ₄ 自律的 |
| ② | B ₁ 他律的 | B ₂ 自律的 | B ₃ 自律的 | B ₄ 他律的 |
| ③ | B ₁ 自律的 | B ₂ 他律的 | B ₃ 他律的 | B ₄ 他律的 |
| ④ | B ₁ 自律的 | B ₂ 他律的 | B ₃ 他律的 | B ₄ 自律的 |
| ⑤ | B ₁ 自律的 | B ₂ 他律的 | B ₃ 自律的 | B ₄ 他律的 |

〔問十二〕 傍線——部(6)「未来が過去に奪われ始めている」の意味としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中か

ら一つ選びなさい。

- ① 過去の情報が過剰にあふれているため、将来に明るい希望が持てなくなっている。
- ② 過去に基づいたことしかできず、真に新しい未来を築けなくなりつつある。
- ③ 未来の予想に、過去の情報の分析も使われるようになっていく。
- ④ 未来を創造するために、人間はAIに過度に依存し始めている。
- ⑤ 人間は過去の歴史を重んじすぎて、ゼロから一を創造する力を失い始めている。

〔問十二〕

空欄

C

に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 唄うことである
- ② 唄うかもしれない
- ③ 唄うだけではない
- ④ 唄うに違いない
- ⑤ 唄わないわけがない

〔問十三〕

空欄

D

に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① と言えるのではない
- ② と言われている
- ③ と言わなければならない
- ④ と言えないかもしれない
- ⑤ と言えないだろう

〔問十四〕

傍線——部(7)「身体の共鳴」の説明としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① ゴリラを含め他の動物には不可能で、社交する人間だけができる。
- ② 一五〇人以下の小規模な集団内でしか成立しない。
- ③ 人々を集め、物語を共有することなので、言葉の獲得が不可欠である。
- ④ 帛紗ふくささばきや茶器の扱いなど、茶道における身体作法のことである。
- ⑤ 身体の動きが生み出すリズムを共有することであり、仲間意識を生み出せる。

〔問十五〕

傍線——部(8)の茶道における「ホスト」の対義語としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 顧客
- ② 食客
- ③ 観客
- ④ 来客
- ⑤ 論客

〔問十六〕

本文の主旨としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ①サルや類人猿と人間を質的に分かťものは社会脳存在であり、人間の大きな脳は言葉の獲得を可能にし、共感能力を高めた。
- ②現代ではSNSやメールを使うため会話をしなくてもよくなり、考える力や判断力までAIに委ねてしまい、脳の劣化が進んでいる。
- ③言葉を獲得して意思伝達能力が飛躍的に向上したことにより、人間の脳は大きくなり、さらに社会の規模を拡大できようになった。
- ④一五〇人程度の集団で発達した共感能力は、人口の多い都市に住んでいると衰えてしまい、仲間意識を持つことも困難になる。
- ⑤音楽的な声と踊れる身体を得て共感能力を高めたからこそ、人間は集団の規模をより拡大し、脳も大きくなり、言葉を獲得するに至った。

【二】

次の文章は一九七九年に出版された『日常性の社会学』の一部です。本文中の「いまから二、三十年まえ」は一九五〇年代ごろのことを、「この十年ほど」は一九七〇年代ごろのことを指します。このことを踏まえて、以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

パリだのホノルルだの、日本からの旅行者の多いところで、「おにぎり」屋さんが大繁昌^{はんじょう}だそうである。なにも、遠い外国にまで出かけて、おにぎりでもあるまい、と冷笑する人もいる。たしかに、世界のそれぞれの都市は、それぞれにその土地のおいしい食事を用意してくれているわけなので、わざわざそういうところで、日本の食べもの、とりわけおにぎりなどというソボク^{ソボク}きわるものをえらんで食べるのは、バカげているといえはバカげている。パリには、本場のフランス料理がいっぱいあるし、ホノルルだって、結構おいしいアメリカふうの料理を食べることが出来る。おにぎりなんか、日本に帰ればいくらだって食べられるのだから、ほんとうは、土地のものを食べるにこしたことはない。ましてや、異国でおにぎりを食べてみて、ごはんの炊きぐあいが硬すぎるとか、梅干しが上等でないとか文句をつけるのは愚^{おろ}の骨頂^{こてい}というものであろう。すべて、日本のとおりにできるはずがないのである。

（ア）、理屈ではそのとおりであっても、じつさいには、そういうわけにはゆかない。食べものの習慣というのはおそろしいもので、いくら西洋の料理がおいしくても、ときには、お米のごはんが食べなくなる。べつだんゼイタクはいわない、しかし、とにかく、いささか腹ごたえのあるお米のごはん——ということになると、帰するところ、おにぎり、というのがわれら日本民族の国民的合意なのではあるまいか。ある人からきいたところによると、大きな団体旅行が到着した日など、ホノルルのおにぎり屋さんは、一日に千五百個ほどの注文をうけることがあるという。それは、まさしく、日本文化の健在をしめす証拠だろう、とわたしは思う。大げさにいえば、おにぎり、というのは、日本文化の集約点のひとつなのだ。⁽²⁾

おにぎり、というものの民俗宗教的な背景については、柳田国男先生の「食物と心臓」というすばらしい論考がある。現在でも、地方によって、おにぎりは宗教行事にしばしばつかわれていて、たとえば秋田県では、宝珠のかたちになぎったお

にぎりをお前にそなえるし、鹿児島県で「しょうろくめし」というのは、おにぎりに箸^{はし}をさしたものである。いうまでもなく、これも仏さまへの供物だ。おにぎりは、日本人の食生活、^aひいては宗教生活のなかで、きわめて重要な役割をはたしているのである。

いかにわれわれにとって、おにぎりが大事であるかは、風水害だの火災だのという緊急の事態におけるわれわれの行動を思い出してみたらよい。ひもじい思いをしている被災者たちを救うために、われわれは、さっそく「炊出し」ということをする。とにかく、たくさんごはんを炊いて、そこにたとえば婦人会の人たちが総出であつまり、おにぎりをつくるのである。おにぎりは、緊急食でもあり、そして、それさえあれば、さしあたり充分な基本食なのだ。運動会だの遠足だのの学校行事のなかでも、おにぎりの伝統はまだ消えていない。竹の皮につつまれた、ずっしりと手ごたえのあるおにぎりは、ほとんどすべての日本人の幼時経験のなかに、深く根をおろしているのである。

こんなにも重要なおにぎりというものが、いつ、どんなふうにしてつくられてきたのか、はよくわからない。しかし、歴史をさかのぼってみると、その原型はどうやら平安時代の「屯食^{とんじき}」というものであるらしい。「屯^{とん}」とは、もともととは、兵士たちがたむろする陣屋、というような意味で、したがって「屯食^{とんじき}」とは、軍用の陣中食、といったようなもの。それは、ごはんを卵型にかためたもので、携帯にも便利だし、つくるのも簡単。兵隊さん用には、格好^bの簡易食であった。そして、それは、やがて、都市の文化のなかにも組み入れられてくる。すなわち、平安時代の貴族たちが宴会などをひらくとき、下級の従者たちに「屯食」をくばるようになったのだ。主人たちが、飲めや歌えの大さわぎをしているとき、家来たちが、ただばんやりと、（イ）ひもじい思いをしている、というのはあんまりおもしろいことではない。こんにちでいえば、さしずめ、高級官僚や実業家が料亭で宴会をしているとき、自動車のなかでポツネンと宴会のおわるのを待ちつづける運転手さんのようなもので、いわば、忘れられがちな存在——そういう人たちのために、「屯食」を貴族たちがあたえたのである。それは、深層心理学的にいえば、歓楽に酔うエリートたちの、一種の

A

の反映であった、とかがえてもさしつかえないだろう。

しかし、平安貴族の精神分析は、さしあたり、ここでの問題ではない。ここで問題にしたいのは、「屯食」、すなわちおにぎりが携行食としてまず考案された、という事実である。遠くに出かけるとき、簡単に持ってゆくことのできる食事——それがおにぎりというものの本質なのだ。とくに器が必要なわけでもなく、またこぼれたりする心配もない。それに、表面を火であぶっておけば、しばらくのあいだフハイを防止することもできる。これを葉っぱにつつまむもよし、竹の皮でつつむもよい。腰にぶらさげたり、肩に背負ったりして出かければ、身体の運動も自由である。携行食としてのおにぎりは、たぶん、人間の食物史のうえでの大傑作のひとつにかぞえることができそうなのだ。

そして、食事をこんなふうにして持ち歩くことは、重大な必要に根ざしていた。というのは、人類の歴史のなかでは、ついこのあいだまで、食べものはそれぞれの人間がじぶんでやりくりするのが原則であったからだ。旅行中に、それぞれの行先でちゃんと食べものが手に入る、という保証はどこにもありはしない。旅行中にじぶんの食べるものは、じぶんで持って歩く——それがあたりまえのすがただったのである。木賃宿^{きちんやど}、というのも、もとをただせば、旅人がそこでただ薪^{たぎ}の提供だけをうけ、じぶんの持ってきた米で自炊する旅館ということで、薪賃^{きんちん}だけを払うから「木賃」宿なのである。いまでも、東北のひなびた温泉などでは、このシステム^cが生きている。長期滞在の宿泊客は、お米だの味噌^{みそ}だのはもちろんのこと、ナベ、カマまで持参で出かけてゆく。要するに、出かけた先で、ちゃんと食物が手に入る、というのはきわめてあたらしい事態なのであって、もともと、旅行というものは、それぞれの人間がみずからの計画によってじぶんの食べるものを持参しなければならなかったのだ。

おにぎり、⁽³⁾というのは、そういう文脈のうえでみれば、小旅行用の食べものである。せいぜい一日か二日の移動にさいして、炊事ぬきですぐに食べられるもの——それがおにぎり、というものであり、それは、小旅行用の携行食、すなわち「お弁当」の代表になったのであった。おにぎりとは、（ウ）「弁当」食なのである。

そとに出てはたらく人たちは、古くから昼食を弁当にした。朝と夜は、家族といっしょにとるけれども、たとえば、漁師は海に出かけ、木こりや炭焼きは山に入って一日をすごす。農民だって、家と田畑が離れているときには、弁当持ちで出か

けた。そこでの弁当の基本形態のひとつは、おにぎりだったけれども、ほかにも、いろんなかたちがくふうされた。おにぎりもいいけれど、いささかでも食事のたのしさを演出するために、弁当行李^{ごうり}だの「わっぱ」だという容器ができた。いずれも、農家の人たちが、身のまわりにある材料でつくったお弁当のいれものだ。むかしは、麻袋にごはんをつめたりしていたらしいけれども、弁当行李などは、庶民の知恵の傑作^dで、柳や竹で編んだこの弁当入れにごはんをいれておくと、水分がなかにたまらないから、さっぱりとした味わいが保証された。そして、主婦たちは、たとえわずかの漬物だの干物だのもあっても、いろいろとくふうして、一家のはたらき手の昼食を毎日、用意したのである。

その伝統は、近代の都市文化のなかにもうつがれた。昭和のはじめになるとアルミの弁当箱が発明され、弁当行李だの木製の弁当箱だのは姿を消したけれども、はたらく人たちは、あいかわらず、お弁当を持って出かけた。工場でもオフィスでも、昼食の時間になると、みなそれぞれに弁当箱をあけて食べる風景が見うけられた。サラリーマンのことを「腰弁」などと呼んだ時代もあったが、弁当には、主婦や母親の愛情がこめられていた。弁当は、たんなるエネルギー源としての「食物」を意味するものではなく、大げさにいえば、家族生活の延長としての精神的価値をになっていたのである。弁当箱をあけると、そこから流れ出すのは、なつかしいにおいであった。

⁽⁴⁾ 弁当を持って出かける、というこの風習は、学校生活のなかにもイシヨク^(三)された。小学生も中学生も、朝、出がけに母親から弁当箱をうけとって登校した。ノリだの、塩ザケだの、玉子焼きだの、しよせん弁当のおかずというものは、そんなに変わりばえのするものではなかったけれども、子どもたちにとっては、お弁当の時間は、たのしみであった。ちょうど父親が職場でお弁当をひらいている時間に、子どもたちも、お弁当を学校でひらいた。昼間のはたらく時間には、家族がそれぞれにバラバラな場所にいる。それが近代の都市生活というものの特徴なのだが、それでも、お弁当をつうじて、家族という小さな集団は、ひとつの結合を確認することができた。その意味では、弁当は、家族コミュニケーションの媒体のひとつに⁽⁵⁾かぞえることさえできそうなのである。

じっさい、いまから二、三十年まえのことをかんがえてみると、

B

。ピクニックやハイキング、といえはすぐ

にお弁当をつくったし、劇場に芝居を見にゆくときもお弁当を持っていた。大げさにいえば、外出、ということはすなわち弁当の用意、ということなのだった、といってもよい。動物園でも、遊園地でも、どこに行ってもお弁当をひらく人たちの姿が見うけられた。

しかし、この十年ほどのあいだに、ほんとうにあつというまもなく日本文化のなかから、お弁当というものが姿を消してしまったのである。ふと気がついてみると、もはや、お弁当というものは、どこにもなくなってしまっていたのである。

まず、学校がお弁当を必要としないようになった。給食がはじまったからである。工場やオフィスには、社員食堂ができた。だから、そこでも、弁当持ちの人は、いつのまにかいなくなった。社員食堂がなくても、ビル街のあちこちに、そば屋だの、仕出し屋だのができたから、サラリーマンは、もっぱら、そういうところを利用するようになった。大工さんだの、左官屋さんだのという職人たちは、むかしから大きな弁当箱を持ってしごとに出かけたものだが、こういう人たちも、このごろでは、しばしば出先で丼^{どん}ものをとって食べたりしている。いや、農村でさえ、状況はかわった。わたしがたずねた東北の村では、いま給食センターを計画中であり、これができると、いずれは、農繁期の昼食はセンターが一括して調理するようになるのだそうだ。もはや、お弁当というものは、根こそぎなくなりかけているらしいのである。

旅行に出るときも、われわれはお弁当を持ってゆくことをしない。列車のなかで、自家製のお弁当をひらいている人を見るときどき見上げるが、それはこんにちでは完全に少数派であって、われわれの大部分は、ビュッフェで食事をしたり、あるいは、駅弁を買って食べたりする。駅弁というのは、正しくは「駅売り弁当」ということであって、なるほど「弁当」ということは、そこにちゃんとのこっているけれども、近世以降の、家族のコミュニケーション媒体としての弁当、という意味は、C。

駅弁というものは、明治十八年からつくられていた。ここでも、さいしょは、おにぎりにタクアンという簡単なものだったけれども、やがてこんにちの幕の内形式になった。それが日本における近代の旅情をつくりあげたというのは事実であり、全国のいくつかの駅には、たしかに名物弁当がある。富山のますずしだの、山陰のかに弁当、横川の釜^{かま}めし、といったふう

に、わたしなどにしても、いくつか、おいしい駅弁を知っている。しかしそれは、職業的⁽⁶⁾なお弁当屋さんのつくったお弁当であって、かつての日本の家庭にあったお弁当の意味は、そのかけらをもとどめていないのである。

（加藤秀俊『日常性の社会学』角川書店より。文中省略あり。）

〔問二〕 太線——部(一)ゝ(三)の漢字を、次の①ゝ⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (一) | ソボク | ① | 僕 | ② | 睦 | ③ | 黙 | ④ | 朴 | ⑤ | 墨 |
| (二) | フハイ | ① | 負 | ② | 腐 | ③ | 不 | ④ | 怖 | ⑤ | 訃 |
| (三) | イシヨク | ① | 異 | ② | 衣 | ③ | 委 | ④ | 移 | ⑤ | 維 |

〔問二〕 傍線——部(1)「骨頂」の意味にもっとも近い言葉を、次の①ゝ⑤の中から一つ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | 象徴 | ② | 典型 | ③ | 究極 | ④ | 筆頭 | ⑤ | 中心 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

〔問三〕 空欄（ア）（ウ）に入るもっともふさわしい言葉を、次の①ゝ⑦の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|
| ① | しかも | ② | すべて | ③ | しかし | ④ | たとえば |
| ⑤ | まるで | ⑥ | つまり | ⑦ | おそらく | | |

〔問四〕

傍線——部(2)「大げさにいえば、おにぎり、というのは、日本文化の集約点のひとつなのだ」で示された筆者の考えとしてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 海外旅行に出ている日本人がおにぎりにしか興味を示さないほど、おにぎりは日本文化の象徴である。
- ② 習慣として仕方なくおにぎりを食べるという点で、おにぎりは日本文化そのものである。
- ③ 海外で日本人がおにぎりを選ぶのは、おにぎりが唯一の日本文化だからである。
- ④ 日本人も外国人も、日本の代表的な食べ物としておにぎりを認識している。
- ⑤ 海外旅行に出ている日本人が食べたくなるほど、おにぎりは日本の食文化として浸透している。

〔問五〕

波線~~~~部 a～dの言い換えとしてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|------|---|----------------------|---|--------|---|-------|---|--------------------|---|--------|
| a | ひいては | ① | さらには | ② | あるいは | ③ | ましてや | ④ | ではなく | ⑤ | というよりも |
| b | 格好の | ① | 贅沢な ^{ぜいたくな} | ② | 打ってつけの | ③ | 期待通りの | ④ | 不憫な ^{ふびん} | ⑤ | 物足りない |
| c | システム | ① | 仕組 | ② | 感覚 | ③ | 罰則 | ④ | 伝統 | ⑤ | 契約 |
| d | 傑作 | ① | 合作 | ② | 遺作 | ③ | 駄作 | ④ | 試作 | ⑤ | 秀作 |

〔問六〕

空欄

A

に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 猜疑心さいぎしん
- ② 羞恥心しうししん
- ③ 虚栄心きよえしん
- ④ 劣等感りやうとうかん
- ⑤ 罪悪感ざいあくかん

〔問七〕

傍線——部(3)「そういう文脈」が指す事柄としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 今も昔も、長期滞在の場合は最低限の食料を持参するだけでよい。
- ② 食べ物が入手できるか否かは、滞在先によってまちまちである。
- ③ 薪の提供があるのは木賃宿のみで、それ以外の宿は薪の提供すらない。
- ④ 自らの旅行計画に合わせて、自分が食べるものを持参する必要があった。
- ⑤ 東北地方を旅行する者は、お米や味噌を持参してしかるべきである。

〔問八〕 傍線——部(4)「弁当を持って出かける、というこの風習」について、本文の内容と合致しないものを次の①～⑤

の中から一つ選びなさい。

- ① 昼食用の弁当を持って出かけたのは、漁師、農民といった第一次産業従事者だけではなかった。
- ② 外で働く人たち向けの弁当は、主婦や母親たちだけが作っていた。
- ③ 持っていく弁当の容器は、時代の変化とともに少しずつ姿を変えていった。
- ④ 昼食時間に弁当を食べるといふ風景は、工場やオフィス以外の場所でもみられた。
- ⑤ 弁当は、人間としてエネルギー源を確保すること以上に、精神的価値をになっていた。

〔問九〕 傍線——部(5)「弁当は、家族コミュニケーションの媒体のひとつにかぞえることさえできそうなのである」と筆者

が思う理由としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 弁当のおかずには、主婦や母親の愛情がたっぷりと凝縮されているから。
- ② 母親が作った弁当を食べることは、夫や子にとって楽しみのひとつであったから。
- ③ 家族のつながりを感じられる唯一の瞬間が、弁当を食べる昼食時間だったから。
- ④ 別々の場所にいながらも、家族の一員であることを確認させる機能が弁当にはあるから。
- ⑤ 弁当箱から漂ういつもの食卓のにおいを嗅ぐことで、家族であることを実感するから。

〔問十〕

空欄

B

に入るもっともふさわしい文を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① 日本の家族生活のなかでは、ずいぶんしばしばお弁当がつくられていたようである
- ② 日本の家族生活とは関係なく、あらゆる場面でお弁当が重宝されていたようである
- ③ 日本の家族生活において、お弁当をつくらない家族など存在しなかった
- ④ 日本の家族生活において、お弁当をつくる主婦の大変さは無視されていたようである
- ⑤ 日本の家族生活のなかでは、しばしばお弁当の具材をめぐって家庭内論争があった

〔問十二〕

空欄

C

に入るもっともふさわしい言葉を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① そのほとんどが維持された
- ② まったく薄れてしまった
- ③ むしろ強化されてしまった
- ④ まったくの嘘^{うそ}であった
- ⑤ 多くの誤解を招いてしまった

〔問十二〕

傍線

——部(6)

「職業的」

とおおむね同じ意味を表す言葉として、もっともふさわしいものを次の①～⑤の中か

ら一つ選びなさい。

- ① 人工的
- ② 機械的
- ③ 専門的
- ④ 一時的
- ⑤ 功利的

問十三

本文の主旨としてもっともふさわしいものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

- ① お弁当こそ、家族のコミュニケーションを円滑にする日常生活のアイテムであった。
- ② 家族のコミュニケーションの媒体であるお弁当は、ときに主婦に負担を集中させてきた。
- ③ 家族のコミュニケーションの媒体であったお弁当は、もはやこの社会から絶滅した。
- ④ 家族のコミュニケーション媒体としてのお弁当の意味は、社会の変化に伴い変わってしまった。
- ⑤ 家族のコミュニケーション媒体としてのお弁当の存在意義は、不滅のものである。

【解 答 例】

入試年度 : 2025
入試種別 : 一般選抜
前期日程 1日目
科 目 : 国 語

問No.	解答番号
1	1
2	2
3	4
4	2
5	3
6	3
7	10
8	6
9	9
10	5
11	1
12	1
13	3
14	4
15	5
16	4
17	2
18	3
19	1
20	5
21	4
22	5
23	4
24	2
25	4

問No.	解答番号
26	3
27	3
28	1
29	6
30	5
31	1
32	2
33	1
34	5
35	5
36	4
37	2
38	4
39	1
40	2
41	3
42	4